



第33代アメリカ大統領 H.S. トルーマン



第32代アメリカ大統領 F.D. ルーズベルト



終戦時のアメリカ国務長官 J.F. バーンズ

原爆投下の首謀者はだれか

J・F・バーンズとルーズベルトの確執

トルーマンとの共謀

連載第2回

一九四四年大統領選をめぐるバーンズとルーズベルトの確執

11 再度の副大統領出馬

——楽器の弦を奏できるように、弄ばれて副大統領への再挑戦

一九四四年の夏、ルーズベルトの大統領四選出馬のための党内選挙と副大統領指名を行う民主党シカゴ大会が予定された。

FDRは、大統領選挙への出馬に乗り気ではなかったが、今回は共和党から若くてタレント性の豊かなトーマス・デューイが出る。これに対し民主党内に対抗できる有力な候補者がいない。かといって、みすみす共和党に政権を明け渡すわけにはいかない。そこで「大統領は二期まで」の慣例

を再度破って、自分が国民から人気があり、戦時であることを理由に四期目の出馬をするほかなかった。

三月のある日、バーンズはワシントンの事務所に秘書のウォルター・ブラウン、法令制りの名人、ベン・コーエン、そして弁護士の下ナルド・ラッセルの三人を呼んだ。ジミーは、副大統領に立候補するべきか、三人の意見を聞きなかつた。他人の意見を聞くなど、日頃ないことであった。迷っていたのだ。

バーンズは、冒頭、はっきりと言った。
「フランクは、夏の大統領選に間違いなく出馬するであろう。恐らく戦時であることから、再選される可能性は十分ある。」

ただ、彼が前代未聞の四選を果たしたとしても、病のために四年の任期を全うできるかどうかは疑問だ。実際主治医の見立てでは、ここ一年持つのがやっととの噂もある。とすれば、こんどの副大統領選でその地位を射止めた者は、任期途中で大統領の椅子を確実に手に入れることになるであろう。

さて、こうした情勢の中で、私が副大統領に立つべきか皆の意見を聞かせて欲しい——
まずブラウンが口を切った。「間違いなく現副大統領のウォレスが再出馬するでしょう。彼は、FDRのお気に入りですから。」

ですが、今のウォレス副大統領は、大統領とジミーの陰に隠れてしまって、さしたる仕事もしていません。

実際、大統領に代わって国内を取り仕切っているのはジミーだから、どっちが副大統領にふさわしいかはつきりしていません。それに、彼は神智学とかいうけつたいな宗教に凝っていて、党内からもよく思われていません。ジミーは、今回ぜひとも立候補すべきです」

ラッセルもそれに口を揃えた。

「私も、ウォルターとまったく同意見です。今度は間違いない、ウォレスに勝ちますよ」

ベン・コーエンも言った。

「ウォレス以外に出馬する有力な人物はいないと思います。ライバルは彼だけでしょう。ですから、ジミーはぜひ立候補されればよいと思います。必ず勝ちますよ」

そこでジミーは聞いた。

「大統領の周りの者は、ウォレスのことをどう言っているかね？」

「ホプキンス特別補佐官やハネガン議長らは、ウォレスのことを良くは言っていない。大統領にとって害はあっても益なし、ともつばらの噂です」

「彼は共産党員ではないかと噂されています。そのうえ、異端の宗教にはまっぴらから、カトリック系からもよくは思われていない。清廉潔白も人道主義も度を超している

の大統領は務まるまいとも見られていた」

ウォレスは、アイオワの出身で、非常に気真面目で野心もなく、政治向きの人間ではなかった。もともと、祖父が始めた農業関係の地方紙の編集者であった。ところが、まわりの推薦で同州の上院議員の後釜にと出馬する羽目になり、思い掛けず政治の世界に足を踏み入れた。

有名な映画「スミス氏、ワシントンへ行く」(日本語訳「スミス都へ行く」)に登場するジニームズ・スチュアート演ずるスミスは、ウォレスをモデルにしている。映画の中では、議会で長演説をして政治の腐敗を攻撃する善良な市民議員であった。本人は、自由と平和、人類の平等を希求し、戦争を憎み、人種差別に反対する。このリベラル思考ゆえに、大統領に気に入られていた。

しかし、彼は神智学という、風変わった宗教的哲学に凝り、極端な理想主義思想を振り回す、いわば「アメリカのドン・キホーテ」と言われる異端者であった。共産主義者ではないかと疑われ、警戒されて、党内では主流にはなれなかった。FDR同様、国民から高い支持を得ていたが、古い体質のペテラン幹部からは嫌われていた。彼が議員当選以来、常に党幹部の金銭的腐敗と権謀術数による裏取引の体質を非難し続けていたからである。そんな状況の中で、ウォレスは、FDRと一般国民の根強い支持を受けて再選に向け、立候補したのだ。

「……と、有力者と付き合いの多いベン・コーエンは答えた。

三人の意見はおしなべて、四期目の大統領の健康を懸念し任期中に必ず副大統領との交代があり得ると考え、ぜひとも出馬すべきとの意見であった。一方、FDRお気に入りウォレスが再出馬するであろうことも予測された。彼は強敵には違いないが、プレスも、政治能力からいって「戦時の大統領が務まるのは、ジミー以外にない」との意見が大勢だと伝えた。

実際、バーンズ自身も副大統領になるのを当然のように思っていた。だが彼は、四年前の立候補が、党内のバーンズ反対派とFDRの裏切りで、失敗に終わった苦い経験の思い出し、楽観できないでいた。

ライバル、ウォレス現副大統領の人物像

ヘンリー・ウォレスは、リベラルの中でも左派である。三三年には、FDRは彼を農務長官に抜擢した。農業に明るい彼はこれに答えて、農家への支援策や生産調整によって農作物の価格と農業収入の安定化に成功した。FDRは、業績を挙げた彼を高く評価した。

そして、四〇年のシカゴ民主党大会で大統領が三期目に挑んだ時、彼を副大統領に指名した。だから、下馬評では、四四年の民主党大会でもウォレスの再選も充分あり得ると観測されていた。だが、もしFDRが他界したとき、戦時

ハネガン動く

民主党の長老、ミズーリ州出身で全米委員会議長のポプ・ハネガンやシカゴ市長のフランク・ケリーらが、周囲の者に「ウォレスが再選されることはまずあるまい。次は、ジミー・バーンズで決まりだ」と話しているのを、バーンズも聞いて知っている。

ハネガンは六月の下旬、大統領と会ってこんな会話をしている。

「もし、貴方が再びウォレスを副大統領に指名すると、党内からの反発は大きく収拾がつかない事態となるでしょう。ぜひ再選は避けてください。党内の派閥領袖は、彼が再選されないことを望んでいます」

その代わりにバーンズを選べば、貴方の大統領選挙は楽勝です……」

これに対し、大統領は、思い出して言った。

「でも、前回は、ジミーは宗教問題でダメになった」

「私もカトリックですが、誰かが改宗を非難したことは事実です。でも、そんなことは問題ではないと思います。ジミーを副大統領にしたからといって、カトリック信者が貴方に投票しないということにはならない」

と、ポプは反論した。その場では、「バーンズ指名」で二人は合意した。

ハネガンは、その結果をバーンズに伝えた。ただ、海千

山千のハネガンがウォレスの再選阻止を考えていたのは間違いないが、バーンズを本心から推していたかは疑わしい。ホプキンスによる打診

依然として心の片隅にはFDRへの疑念が残ってはいたものの、千載一遇の機会を逃すわけにいかない。バーンズは、六月の末に出馬を決心した。彼は、立候補の意思を前もって二度三度FDRに伝えた。フランク(FDR)は賛成してくれた。

七月一日、大統領の側近ハリー・L・ホプキンスがFDRと昼食を共にすることを、バーンズは聞きつけた。副大統領への立候補の意思を、彼から大統領に伝えてもらい、反応を確かめたかった。ホプキンスはニューデールや武器貸与法のことや、バーンズと共に大統領を助けた。外交関係で数少ない助言者の一人として彼に仕え、期待に応えていた。

ホプキンスが昼食の場で、単刀直入に尋ねた。

「大統領閣下、ジミー・バーンズは貴方が反対されないのであれば、ぜひとも副大統領の指名を得たいと言っています。彼をどう思っていますか？」

「バーンズにとって、副大統領への道は非常に狭い」

「閣下、貴方はもちろん、わが国の先々のことをいつもお考えでしょう。失礼ですが、閣下の身に最悪の事態が起き

いと思っと思っていますが……と、切り出した。

「それは君の言うとおり、問題ではない。党の有力者が懸念しているのは黒人問題なのだ。君は南部議員と一緒に、人頭税(Poll Tax)を通そうとしている。これは、黒人やブルーカラー、経済弱者にとって大変な負担だ。それで、リベラル派は対抗して人頭税法案の制定を考えている。ところが、君たちはこれを阻止しようとしている。また、黒人を守るためのリンチ禁止法や労働条件改善の法律についても、君は反対した。」

その君を副大統領に指名したら、私は多くの黒人票や労働者票を失うことになってしまう。そのことを、ウォレスやプリンたちが心配しているのだ。」

しかしバーンズは、抵抗した。

「私のことだけでなく、ウォレスの弱点も考えるべきです。彼の欠点や不人気については、党の有力者からお聞き及びましょう。彼を選ぶことで閣下が手にいれる票と、失う票と、そして、私を指名することで手に入れる票と失う票とを、よく比べていただきたい。」

守勢に回ったFDRは、年齢のことを持ち出した。

「私は六二歳だが、君は六六歳だ。これは問題だ。」

「私は、ご存じのようにハード・ワーカーです。朝早くから夜遅くまで働いています。健康についてご心配には及びません」とバーンズは反論した。病もちのルーズベルトに

るかもしれないという万一のこともお考えでしょう。その時、誰が後継者として最善とお考えでしょうか？」

「そりゃあ、ジミーだ。なぜって、彼以上に政治のことに精通している者はいないから」と彼は即座に答えた。

しばらく黙っていたが、例によってフランクは、行きつ、戻りつしているようであった。

「確かに彼の政治能力は抜群だ。しかし、知つての通り、以前、ジミーはリンチ禁止法案に反対した。その彼を指名すれば、黒人たちは私への信任に反対しかねない……」

ホプキンスは翌日、大統領と話したことをジミー・バーンズに伝えた。ホプキンスの誠意には感謝したが、内心、一やっぱり、そうか」とがっかりした。そこでFDRに直接会って、彼の考えを直接確かめたいと思った。これが、最後のチャンスとなるはずだと考えた。

バーンズとFDRの直接対決

民主党シカゴ大会まで残り少ない七月二三日、ルーズベルトを訪ねた。

「大統領閣下、四年前に改宗問題が理由で、私は副大統領のチケットを手に入れることができませんでした。ですが国民の一人として宗教の自由があります。ですから、あのことでとやかく言われる道理はありません。また、当時、閣下は改宗のことを重要な問題ではないと言われていたと聞いています。ですから、今回はこの件は取りあげられな



1944年6月6日決行された連合軍のノルマンディ上陸作戦

対して皮肉な言い回しであった。

FDRは、最後に根負けしたのか、

「君は、確かに類まれな能力と経験を持っている。物事を片付けていく手腕や人を説得する交渉力も抜群だ。ハネガン議長にも言っておいたが、君は、副大統領に最適だ。ただ、外交については、もっと経験を積む必要があるがね……」

と、黒目をはつきりさせない言葉で締めくくった。

暗転と失意

さて、四四年の第一回日の大統領・副大統領の予備選挙では、FDRとウォレスの組み合わせが圧倒的な一位であった。七月初旬のギャラップの世論調査では、八人の副大統領立候補者の中で、ウォレスは、64%を獲得し群を抜いていた。なお、その時の大統領代行とまで言われていたバーンズは、なんと3%でビリから二番目、トルーマンに至っては2%のドンジリであった。能力と人気は別物のようだ。

明日が党内最終投票日という七月二十日だった。シカゴの早朝、トルーマンが突然バーンズのホテルにやってきて、消え入るような小声で伝えた。

「私は、貴方の副大統領立候補の応援演説を明日、予定していましたが、できなくなりました。」

実は昨夜、大統領から電話があった、突然、私を「副大

ブラウンは、車窓のガラスに映ったジミーの横顔を見た。いつもより一層眉と目尻が下がって、頬の肉がげっそり瘦けている。宵闇に浮かんだその面影は、哀れに思えた。ジミーが口にした「嘘つき野郎」が、そして「演奏者」が誰を指しているのか、ウォルターには察しがついていた。

サウスカロライナからやって来て、長い政治経歴を経て自信満々のアイリッシュ、ジミー・バーンズはいつも陽気で不撓不屈の楽道家であった。だが、FDRに裏切られた今はどうだ。敗北の苦しみに苛まれ悲嘆の底にある。

なぜ？ 世論調査ではドン尻のトルーマンがどうして副大統領に？ バーンズがさんざん面倒を見てきたあのトルーマンが、自分を飛び越えて……一体、なぜ、このような予告も何もない、しかも誰もが予想しなかったようなことでん返しが起きたのか。

民主党内の宿年の懸案、リベラル派と保守派の対立が噴出した。この、表向きの政治評論家のコメントではあった。このまま決選投票になれば、妙に正義感に溢れたウォレスが再選されると見た民主党内の重鎮や派閥の領袖らは、強い危機感を持った。反対に回った有力者は、ロバート・ハネガン議長、保守派の石油業者で、党の資金担当エドウィン・ポリー、ニューヨークの政治ボス、エド・フリン、シカゴ市長のエドワード・ケリーなどの連中で、彼らは大変な慌てようであった。

統領に指名する」と言われました。何度も断ったのですが、せひとも受けてくれ」と命令されたので……

大変申し上げ難いことですが、ジミー、ご了承いただくようお願いします」

バーンズはいくぶん、こわばった表情で

「おめでとう。よかったね」と感じて握手した。

翌日の民主党シカゴ大会最終日、FDRは、トルーマンを副大統領候補に指名し、信任を得た。予想外の結果になった。

ハリー・トルーマンから思いがけない報告を受けたジミー・バーンズは、大会の最終日待たず、FDRに挨拶もしないで、前日の二日の夜、夫人とブラウンと共にシカゴから夜行列車でワシントンへの帰路についた。

暗い、残酷な旅であった。クリーブランド駅を過ぎる時も、寝もやらずブラット・ホームの薄明かりを見るでもなく、虚ろな視線を向けていた。

ジミーは誰に言うともなく、

「嘘つき野郎が」と、呟いていた。それからしばらくして、ジミーは続けた。

「まるで、演奏者が楽器の弦を奏でるように、間違いない男たちの野心を弄んだのだ」

彼らも、FDRの四期目には健康不安で、任期途中に大統領交替も十分ありうろと見ていた。そうなったときに、以前から党幹部の腐敗を非難し、声高に浄化を叫んでいるウォレスを副大統領にしておくことは、不都合極まりない。そこで彼らは急遽、予備選以降の投票では、なりふり構わず、公場への入場者を規制し、裏で画策し、買収もして、ウォレスへの投票を阻止してしまった。

さらに念のため大統領に縁がかりで圧力を掛け、ウォレスの再選を諦めさせた。FDRは既に党内を仕切り、自分の意思を押し通すだけの力を失っていた。

一方、バーンズはどうであるうか。

大統領は彼の能力は買っていたものの、南部保守派としての首動をこれ以上我慢できなかった。

また、党の派閥領袖や長老たちは、独善的で野心家のバーンズへの権力集中に懸念を抱いていた。ウォレスの叩き落としに目処が付くと、返す刀でバーンズも切り捨てた。そして急遽、毒にも薬にもならない中間派のミズーリの田舎者、トルーマンに白羽の矢が立ったのだ。彼のことをFDRが気付けばはずはない。おそらくミズーリ出身のハネガンの思い付きであったであろう。

FDRは、ウォレスを通すのが難しいと判断する一方、バーンズへの権力集中と、政権の右傾化も嫌って、古株たちを迎合したのだ。ルーズベルトには、人事面で、常に

チエック・アンド・バランスが保たれるよう配慮する習性があった。いずれにしても、自身の健康状態を考えての将来を見据えた責任ある選択であったとは、とても言えない。

12 新副大統領、トルーマンの経歴

一九四四年七月の民主党大会で突然副大統領に指名されたトルーマン。さらに翌年一月、ルーズベルトが四期目の大統領になったとき、併せて、自分が新副大統領に就任したことを「飄箆から駒が出た」と思っていたハリー・S・トルーマン。彼の、生い立ちや経歴をざっと見ておこう。

ハリー・S・トルーマンは、一九七二年に死去するまで住んだミズーリ州のインディペンデンスから、百マイル真南に下がったカンザス州との州際の村、ラマーで一八八四年に生まれている。

ハリーの父親は、道路補修の現場監督との兼業農家であった。彼は、まっすぐな気性の、正義感溢れる男らしい人物で、優しさが備わっていた。だが、気が短く喧嘩っ早い一面もあった。ハリーは、その父親のことを誇りに思っていた。

ハリーが六歳のとき、一家はインディペンデンスに引越す。この町はカンザスシティの東隣りで、ワイルド・ウエスト時代には開拓民が西部に向かう基地として賑わった。ちなみに彼の母方の祖父は、西部とこの町の間を行き来す

る駅馬車の隊長であった。

やがて、ハリーは小学校に通い始めた。彼は強度の遠視のため眼鏡が離せなかったため、スポーツをするのも止められている。学校では真面目に勉強し、成績はまずまずであった。ただ、おとなしくて目立つような子ではなかったから、人気者にはなれなかった。昔の記憶に残るほどの少年ではなかったようだ。

本人も少年時代を振り返って「意気地なしかった。だから父にはよくは思われていなかった」と思い出している。ハイスクールを終えると士官学校に進もうと考えたが、遠視のせいで諦めた。大学にも進学しないで、町の銀行の事務員になった。それも長くは続かず、その後父親の野良仕事を手伝うようになった。こうして青年時代は農夫として働いた。

一九一五年からカンザスシティの州兵となり、部隊で酒保係を務め、収益を上げて周囲から注目された。一九一八年三月、第一次大戦でフランスに派遣され、野砲連隊の中隊長になって活躍した。一八年十二月には大尉に昇進する。同年一月に大戦は終わり、翌年春、帰国した。この兵士・隊長としての体験は、その後の、上院議員そして大統領時代を支える基盤の一つになった。

戦争が終わって故郷に帰ったハリーは、幼少のころからあこが憧れの的であったエリザベス(愛称ベス)と、念願法をかいくぐっての酒の密売と、ありとあらゆる不正や違法行為を大っぴらにやっていた。

そういうったボスの悪行をトルーマンは十分承知していたが、背に腹は代えられずお世話になり、悪事にも気のすままないまま加担した。

政界入り

しばらくして、トルーマンはベンダーガストの勧めで、ジャクソン郡の地方判事・主席判事に立候補し選ばれた。彼を使って法的なもめ事を有利に解決させたり、郡の行政を支配するための、ボスの差し金であった。だが、トルーマンの判事としての主たる仕事は、税の取り立てであり、そのほかに、老人、身障者等への公金支払命令、福祉施設の建設、道路整備等への財政投資の許認可業務、郡財政健全化活動などで、州の広域の機関とも交流した。それが、後の連邦議員立候補の基盤造りに役立つとともに、本人の実務能力の向上にもなった。また、それらにはトムへのお返し行為も含まれていた。

その後、トルーマンはベンダーガストの再度の強引な勧めで、一九三四年に連邦上院議員に立候補し、トムのおくどい選挙工作に助けられながらも、州兵と判事時代の業績が実り、当選を果たした。三五年一月の上院議員就任で、五十一歳の遅い中央政界入りであった。

民主党議員になってから早々に、彼は先輩議員で有名な



ハリー・S・トルーマン

かなって結婚した。だが、裕福で立派な家系の娘であったから、彼女の母は不釣り合いのこの結婚に反対であった。いつも義母からトルーマンは辛く扱われ、情けない思いをする。

その後、酒保係の時、相棒であったユダヤ人と洋品雑貨店を始めたが、うまくいかず、ユダヤ人は自己破産し、本人は相当の借金を抱え、長期にわたって返済した。

そこで生活費に困って、カンザスシティの悪名高いトム・ベンダーガストの世話になることになった。

ベンダーガストは、カンザスシティを含むジャクソン郡の民主党議長を務め、地方政治を仕切るボスだ。利権にありついて荒稼ぎをし、強引な借金の取り立て、恐喝、禁酒

パーズとお近づきになる。そして、議員としての作法を教えてもらった。

さて、連戦初めの5のルーズベルト・パーズの章で述べたように、トルーマンが二期目の上院議員選挙に立候補しようとしたとき、「パーズ」の対象者として民主党公認候補から除かれかけていた。それを、パーズに救ってもらい、党公認として立候補できた。さらに、調達に困っていた選挙運動資金を、パーズの紹介でバルークに援助してもらって、上院議員に当選できたのだ。

一九四一年一月、無事、二期目を迎えたトルーマンは、翌月、軍事費の不正使用に関する特別調査報告委員会、またの名を「トルーマン委員会」と言われたが、その委員長におさまった。軍事費支出の妥当性を監視する任務を担った。この仕事は、彼の独特の直観な性格と正義感に打ってつけであった。不正な出費や冗費を次々と見つけ、四四年夏までで総額一五〇億ドル（現在価値で千八百億ドル）の浪費を摘発した。これで、少しは知られた存在になった。

四四年初には、「新兵器の開発」としか知らなかったマンハッタン計画への巨額投資に目を付け、追及しようとしてステイムソン陸軍長官から厳しく咎められた。このプロジェクトは国家の最高機密であったからだ。

四四年七月のシカゴ民主党大会では、トルーマンはパーズの副大統領への立候補を応援しようとした。ところが

で、ワシントンで離れてスパークンバーグに居るうと思っ
ています。

「それは困ったなあ。今の仕事を続けて欲しい」と言っ
て、執拗に引き留めた。

これから先、戦争が終わって平和条約をまとめたり、議
会を通す仕事をやってくれとのお考えであれば別ですが、
今の仕事は勘弁してください。

戦時だと言うのに、石炭や鉄山、鉄道などの労働組合幹部
の、やれ賃上げだのストライキだの言っている連中とのお
付き合いは「免蒙り」たい。お国のためとはいえ、ストライ
キを避けるために労働貴族らのご機嫌を取るのも、いい加
減、馬鹿馬鹿しくなりました。

それが思いの一端であったのは間違いないが、彼の本心
は別のところにあった。実際、一刻も早くFDRとの腐れ
縁を断ち切りたいと考えていたのだ。やはり、二度の副大
統領選に見せたFDRの冷たい仕打ちは忘れられず、裏切
られた傷が今も疼いているのだ。

二人の押し問答はその後も続いたが、結局、パーズは
現職を固辞したまま引き下がった。

事務所に戻ったパーズは、FDRへの本音は言わず、
退職を考えていることをスタッフたちに話した。

「労組の連中との交渉事は、せひともやめるべきです」

思いもかけず、ルーズベルトから突然、副大統領の指名を
受け、なんと兄貴分のパーズを飛び越えてしまった。
副大統領に指名された理由

中間派のトルーマンが指名されたのは、南部保守派とリ
ベラル派の党内対立を回避するためであったと言われてい
る。それ以外の理由は公表されていない。

著者の推測に過ぎないが、ウォレス、ダグラス、パー
ズらが次々と消去される中で、トルーマン委員会での軍事費
のムダ退治に活躍した実績、地区判事と兵役時代の業績が
評価されたのである。さらに、学歴は別として、正直で
誠実な人となりが無難で、党の重鎮、とりわけ地元出身の
ハネガンや大統領から気に入られたことも推量される。F
DRにとっては、ウォレスが否定され、パーズを拒否で
きた以上、副大統領は誰でもよかった。いつもの人事癖の
ようだ。

13 辞職願

十一月のある日、シカゴ大会以来久しぶりに、フランク
とジミーはホワイトハウスで長時間の会話を交わした。そ
の中で、パーズは辞職を切り出した。

「大統領閣下、私は戦時動員局の職を辞したいと思ひます。
現職は非常に忙しく、正直言って負担に感じています。平
和な時代の到来も間近のことから私の役目も一段落したの

で、辞めるタイミングは、今すぐだと、よくないと思ひます。
ヨーロッパの戦いが終わった後のほうがよいでしょう」と
の意見であった。

「今すぐ辞めるといえば、戦時の困難から逃げたとも言わ
れかねないし、大統領との間で、何かもめ事でもあったよ
うに、世間から思われるでしょう」とも助言してくれた。

パーズは心の中で、シカゴで受けた大統領からの酷い
仕打ちを思い出して、もう、若いときのような二人の蜜月
は、ふたたび返ってはこないだろうと思っていた。FDR
と顔を合わせるのは、もう、真つ平ご免だと思つた。しか
し、そのことを彼らに言うこともできないで、結論を出さ
ないまま、話は終わった。

翌日、FDRから電話がかかってきて、昼食を誘われた。
その席にはバルークが同席していた。

フランクが彼にも声をかけていたのだ。彼のいる前では、
ジミーがわがままを通しにく難いであろうとの計算だ。

昨日申し上げたように、現職を続ける積りはありません。
妻も私の気持ちを理解し、スパークンバーグにすでに家を
買ってこれ、引越しの準備を進めています。

大統領からの話は、昨日の繰り返しであった。

「ジミー、せひとも今の仕事を続けて欲しい。君に代わる
人物はいない」と、なんども執拗に口説いた。

バルトクは黙って聞いていたが、頭合いを見て、「どうだい、ジミー、ここまで言ってくれてるんだ。フランクの願いを開き入れたらどうだい？」

暫く無言のバーンズは、根負けして、「私の個人的な願望を率直に言わせてもらえれば、ワシントンにはもう残りたくありません。けれども、まだ戦争が続けている非常時の状態の中で、わがままを押し通すわけにもいかないこともわかっています。」

……もし、大統領閣下がドイツとの戦いが終わるまでは続ける、とおっしゃるのなら引き受けましょう。」

「ジミーが残ってくれることを切望する。そう言ってくれてありがたい」と、大統領は笑みを浮かべた。

事務所に戻ったジミーは、いつものワイルド・ターキーをクラスになみなみと注いで、「一気に飲み干した。そして、断りきれなかった悔しい思いが食道を逆流してくるのを抑え込もうと、もう一杯、喉に落とし込んだ。」

彼は、今の仕事から抜け出して大統領の顔を見なくて済むよう願っていた。しかし、ここで彼と喧嘩別れをするとは得策でないと思った。世間はなんと言ってもFDRの味方だ。酔いも手伝って相題は続いた。

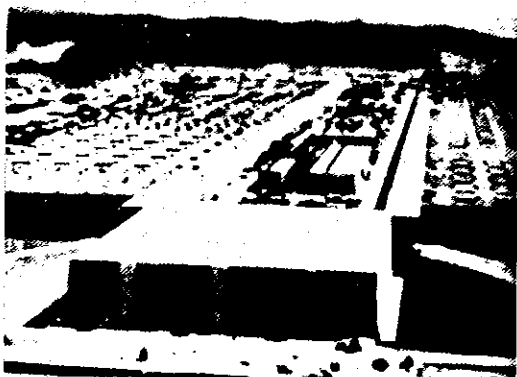
それから数日経ったある日、ハルが國務長官を辞任する

「閣下、私はどういう役回りですか？」 議事録でもとれとおっしゃるのですか？」

「君は、国内の経済と財政状況に明るいし、英、露に対する援助にも精通しているので会議中にいろいろ聞かせてもらいたいことがある。」

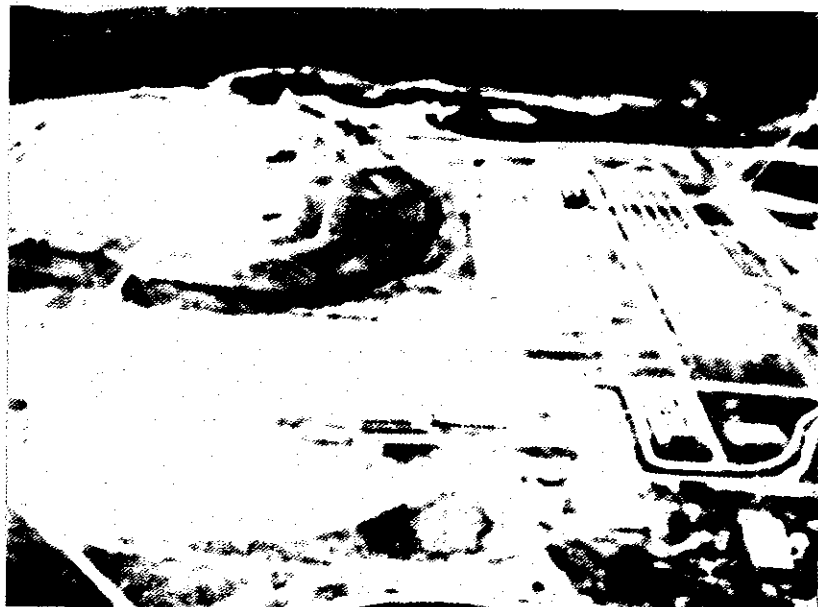
それから、これは非常に大事なことだが、ヤルタ会議は、プレス（メディア）をシャットアウトする。だから、会議が終わった後、その結果をジミーから議会の連中や記者らに、そして国民に報告してもらいたいのだ」と、頼まれた。ジミーは気乗りしなかったが、仕方なく了承した。

（次々に続く）



クリントンの原爆生産工場 / USAEC photo

上と下の写真は、1944年当時進んでいたオークリッジの原爆生産工場。とほうもな広い広さの工場だった



オークリッジの気体拡散工場 / USAEC photo

という情報、バーンズの耳に入った。そして、「その後任にバーンズが選ばれる」という噂話が聞こえてきた。しかし、彼は心を動かされることはなかった。

しばらくして、大会社の経営者、ステテニアスが、國務長官に選ばれた。近々、巨頭会議があるというのに、政治経験は皆無の人物であった。FDRの人扱いの悪い癖が繰り返された。彼には、外交を新任の國務長官に任せる気は、毛頭なかったのだ。

ヤルタ行きを要請される

クリスマスも過ぎた三日、フランクはジミーを呼んだ。

「近々、カリミヤ半島のヤルタで、米・英・ソの三巨頭会議を開く。ジミーも同行してもらいたい。」

「今は、局の仕事が非常に忙しいので、ヤルタへはいけそうにありません。」

「ぜひとも一緒に行つて欲しい。実際、仕事ができるのは君と私しかないのだから。」

「交渉に加われとおっしゃるのですか？」

「いや、そうではない。オブザーバーとして会議に同席してもらいたいのだ。」

これまで、公式の外交交渉の経験のない君にとつては、將來のことを思うとまたとない体験になるし、チャーチルやスターリンという世界の大家とも顔見知りになれるチャンスだ。ぜひ、一緒に行つてほしい。」

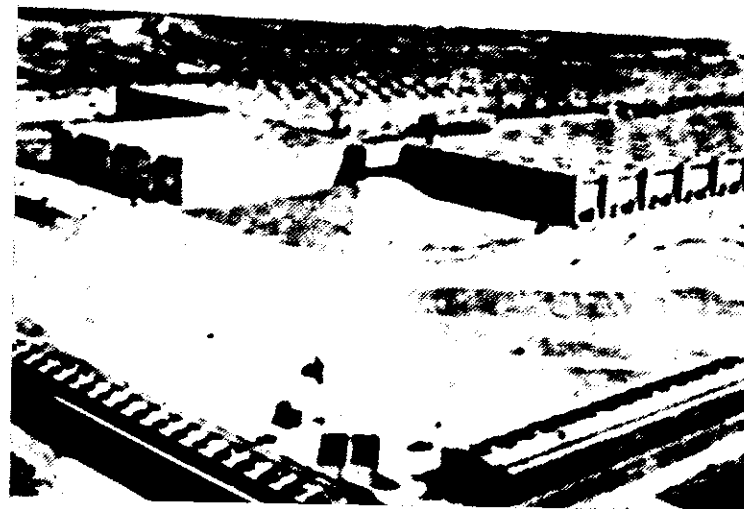
I 主要参考文献(順不同)

1) The Decision to Use the Atomic Bomb and the Architecture of an American Myth by Gar Alperovitz published by Alfred A.Knopf, INC. 1995
 2) Atomic Diplomacy:Hiroshima and Potsdam 1994 Edition by Gar Alperovitz by published by Pluto Press 1994
 3) Secretary of War Henry L. Stimson Diary April 24 to Aug. 9 in 1945
 4) The Making of a Cold Warrior by Robert L. Messer 1975
 5) The End of an Alliance: Byrnes, Roosevelt, Truman and the Origins of the Cold War by Robert L. Messer 1982
 6) Walter J. Brown Diary July 12 to Aug.28 in 1945 (revised by James F. Byrnes)
 7) James F. Byrnes of Carolina A Remembrance by Walter J. Brown 1992
 8) The decision to Use the Atomic Bomb by Henry L. Stimson from Harper's Magazine 1947
 9) President Truman Potsdam Diary July 16 to 30 in 1945
 10) 1945 YEAR OF DECISIONS by Harry S. Truman 1955
 11) Speaking Frankly by James F. Byrnes published by Harper 1947
 12) All in One Lifetime by James F. Byrnes published by Harper 1958
 13) A Beginning for Sanity Reviewed by Norman Cousins and Thomas K.Finletter from The Saturday Review of Literature 1946
 14) Hiroshima's Shadow Edited by Kai Bird and Lawrence Lifschultz 1998
 15) The Decision to Use the Bomb: A Historiographical Update by J. Samuel Walker 1996
 16) The Atomic Bombings Reconsidered by Barton J. Bernstein Foreign Affairs Vol.74,No.1 1995
 17) Understanding the Atomic Bomb and the Japanese Surrender: Missed Opportunities, Little-Known Near Disasters, and Modern Memory by Barton J. Bernstein 1996
 18) Hiroshima at Fifty: The Politics of History and Memory by Martine Sherwin 1995
 19) Japan's Struggle to End the War by U.S. Strategic Bombing Survey 1946
 20) Forrestal's Diary, 13,15 & 24. July, 1945
 21) Brown's Diary 3. July to 10. August, 1945
 22) Hiroshima in America Fifty Years of Denial by Robert J.Lifton & Greg Mitchell 1995

英語文献資料

23) 『黙殺 ホツダム宣言の真実と日本の運命』 仲見著 NIKブックス 2000
 24) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』 ロナルドタカキ著 草思社 1995
 25) 『資料マンハッタン計画』 山極晃・立花誠逸編 岡田良之助訳 大月書店 1993
 26) 『世界を不幸にする原爆カード』 金子敦郎 明石書店 2007
 27) オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』 ストーン&カズニック 早川書房 2013
 28) 『日米戦争と戦後日本』 五百旗頭 真 大阪書籍 1989
 29) 『ニューデール』 新川 健三郎 近藤出版社 1987
 30) 『アメリカ人の歴史』 ホール・ジョンソン著 別宮貞徳訳 共同通信社 2001
 31) 『アメリカ経済の歴史』 秋本英一著 東大出版 1995
 32) 『不思議な余所者王』 マーク・トウェイン著 中川敏訳 集英社 1980
 33) 『ヒロシマ』 ジョン・ハーシー著 石川欽・谷本清・明田川融訳 法政大学出版局 2003
 34) 『原爆を投下するまで日本を降伏させるな』 島居民 草思社 2011
 35) 『日本の選択 第二次世界大戦終戦史録』 外務省編纂 山手書房 1990
 36) 『昭和史と天皇』 色川大吉 岩波セミナーブックス 1991
 37) 『歴史家の嘘と夢』 色川大吉 朝日選書 1977
 38) 『検証・原爆投下決定までの三百日』 パートン・バーンスタイン 中央公論 1995年2月号
 39) 『アメリカの中のヒロシマ』 ロバート J. リフトン、G・ミッチェル共著 岩波書店 1995
 40) 『幻の終戦工作』 竹内修司 文春新書 III7
 41) 『長崎の鐘』 永井 隆 アルバ 1995
 42) 『ヒロシマ・ノート』 大江健三郎 岩波新書 1965

日本語文献資料



1944年当時のクリントンの電磁分離工場の全景 / USAEC photo



七十年前、明るい、雲一つなく晴れ渡った朝、死が空から降り、世界が一変してしまいました。閃光と炎の壁が都市を破壊し、人類が自らを破壊させる手段を所有したことを示したのです。

なぜ私たちは広島を訪れるのか、私たちはそれほど遠くない過去に解き放たれた恐ろしい力を熟慮するために訪れるのです。一〇万人を超える日本人の男女と子どもたち、何千人もの朝鮮人、十数人の米国人捕虜を含む死者を悼むために訪れるのです。彼

ら欲望と同じ欲望から生まれてきたのです。破壊の能力の拡大は新たな制限を伴うことなく、無制限にそれを解き放つてしまいました。

先の大戦ではわずかに数年の間に六千万人もの人たちが亡くなりました。男性、女性、子ども、私たちが何ら変わりのない人たちが、撃たれ、殴られ、行進させられ、爆撃され、投獄され、飢えやガス室で殺されました。戦争の酷さを記録する場所が世界には多数あります。勇氣や英雄主義の物語を語る記念碑、筆舌に尽くしがたい悪行を思い起こさせる墓地や無人の収容所が残っています。

しかし、この空に立ち昇ったキノコ雲のイメージは、私たち人間に人間性そのものの中にある根本的な矛盾を突きつけてきます。私たちが人類たらしめているもの、私たちの考えや想像力、言語、道具をつくる能力、自然を自らの意思のために変化させる能力といったものが、いまやとてつもない破壊能力を私たち自身にもたらすのです。

私たちはいかにしばしば物質的な進歩または社会的革新によって、この真実を見逃ごしてきたでしょう。うか。いかに容易に、私たちは何かより高い大義の名の下に暴力を正当化してきたでしょうか。あらゆる偉大な宗教が愛、平和、公正への道を約束してい

らの魂が私たちに語りかけます。彼らは私たちに心の内側を向け、私たちが何者なのか、これからどのような存在になるのかを深く考えるよう求めているのです。広島を際立たせるのは戦争の事実ではありません。暴力を伴う紛争が古い昔からあったことは遺跡が示しています。火打ち石から刃を作り、木から槍をつくることを学んだ私たちの祖先は、これらの道具を狩猟だけでなく、人間自身に向けても使ったのです。食糧不足、富への渴望、国家主義的な熱烈な思いや宗教的熱情に突き動かされて戦いました。どの大陸でも文明の歴史は戦争にあふれています。いくつもの帝国の

興亡があり、人々は服従を強いられ、また解放されたりしました。それぞれの時期に罪なき人たちが犠牲になりました。だが、その名は時がたつにつれて忘れられていきました。広島と長崎で残酷な終結を迎えることになった先の世界大戦は、最も豊かで、最も国力の強い国々の間で戦われました。その国々の文明は偉大な都市や素晴らしい芸術をもたらしました。思想家たちは正義や調和、真実に関する考えを生み出してきました。しかし戦争は、最も単純な部族間の紛争の原因となった、支配や征服をしたいとい

ます。しかし、いかなる宗教も信仰が殺戮の許可証だと主張する信者を排除していません。国家は人々を犠牲と協力で結びつける物語を伝え、顕著な業績を賞揚しながら台頭します。しかし、それらの同じ物語は、幾度となく異なる人々を抑圧し、その人間性を奪うために使われてきました。

科学は、私たちが海を越えて通信を行い、雲の上を飛び、病を治し、宇宙を知ることの可能性を可能にしました。しかし、これらの同じ力は、これまで以上に効率的な殺戮の道具に転用できるのです。現代の戦争は、私たちにこの真実を教えてくれます。広島がこの真実を教えてくれるのです。

科学技術の進歩は、それと同等の人間の良心の進歩が伴わなければ、人類を破壊させます。原子の分裂を可能にした科学の革命には、同時に道徳上の革命も求められているのです。私たちはこの街の中心に立ち、原子爆弾が投下された瞬間を想像しようと努めます。混乱した子どもたちの恐怖を感じようとしています。私たちは、声なき叫びに耳を傾けます。私たちはそれによって、あの恐ろしい戦争でと同時に、それ以前に起きた戦争においても、それ以後に起きた戦争においても殺されたすべての罪なき人々を思い起こします。

単なる言葉だけでは、こうした苦しみに真の声を与える



ことはできません。私たちは、歴史を直視する責任を分かち合っています。そして、こうした苦しみの再発を防ぐためにどうやり方を変えるべきなのか問いかねばなりません。いつか、証言するヒバクシャ(被爆者)の声が聞けなくなる日がくるでしょう。しかし、一九四五年八月六日の朝の記憶を色褪せさせてはなりません。その記憶は、私たちが現状への慢心と戦うことを可能にします。それは私たちの道徳的な想像力を煽り、変化をもたらします。

あの運命の日以来、私たちは希望への選択をしてきました。米国と日本は同盟だけでなく、私たちの市民に戦争を通じて得られるよりも、はるかに多くのものをもたらす友情を築いてきました。

欧州は、戦場を通商と民主主義の絆に置き換える連合を作り上げました。抑圧された人々と国々は解放を勝ち得ました。国際社会は戦争を回避し、核兵器の存在を制限し、縮小し、最終的に廃絶するための組織と条約を作りました。それでもなお現在の世界ではさまざまな攻撃的行動を目的の当たりにします。あらゆるテロ、腐敗、残酷性、抑圧は、私たちの仕事に終わりが無いことを物語っています。

私たちは、悪いことをなす人間の能力を消すことはできないかもしれません。だからこそ、国家や私たちが作り上げた同盟は、自らを守る手段を持たなければなりません。しかし同時に、私の国のように核を保有する国々は、恐怖

運ぶことができます。人類が共通の存在であることを頭に描き、戦争をより遠いものにし、残酷な行為は受け入れられたい物語を、子どもたちに伝えることができるのです。私たちはこうした物語を、ヒバクシャの中に見ることができません。原爆を投下した爆撃機のパイロットを許した女性もいます。なぜなら、彼女は本当に憎いのは戦争そのものだと分かっていたからです。広島で殺された米国人の家族を捜し出した男性がいました。彼らの家族の喪失は自分たちの家族の喪失と同じだと彼は思ったからなのです。私の国の物語はシンブルな言葉から始まりました。すべての人は等しくつくられ、生命、自由、幸福追求を含む、奪われることのない権利を創造者から授けられた。その理想を実現するのは、私たちの国内であっても、国民同士であっても、決して簡単なことではありませんでした。しかし、その理想に忠実であり続けることは、努力するに値します。大陸を越え、海を越えて追い求められるべき理想

の論理にとらわれず、核兵器なき世界を追求する勇氣を持たなければなりません。

私の生きている間に、この目標は実現できないかもしれませんが。しかし、たゆまぬ努力によって、悲劇が起きる可能性を減じることができます。私たちは核の根絶につながる道筋を示すことができます。私たちは、ほかの国への核拡散を止め、狂信者たちから死をもたらす(核)物質を遠ざけることができます。

しかし、それでもまだ十分とは言えません。なぜなら、粗製のライフルや榴弾でさえ、どれだけ恐ろしい規模の暴力を起こせるのか、私たちは現代の世界で目の当たりにしているからです。私たちは戦争そのものへの考え方を変えなければいけません。それによって、外交を通じて紛争を防ぎ、すでに始まった紛争を終わらせる努力をしなければならぬのです。相互依存の高まりが、暴力的な競争の原因になるのではなく、平和的な協力を生むものだと考えるべきです。私たちの国家を、破壊能力によってではなく、何を築き上げるかで定義づけるのです。

そして、何にもまして、私たちは人類の仲間として、互いの関係をつくり直さなければいけません。なぜなら、そのことも人類を比喩なき種にしているものだからです。私たちは遺伝情報によって、過去の間違いを繰り返す運命を定められているわけではありません。私たちは学び、自ら

かなければならない物語なのです。そしてそれが、私たちが広島を訪れる理由です。私たちが愛する人のことを考えるためです。朝起きて最初に見る子どもたちの笑顔や、食卓越しの伴侶の優しい触れあい、親からの心安らぐ抱擁のことを考えるためです。私たちはそうしたことを思い浮かべることによって、七十年前、同じ大切な時間がここにあったということを知ることができるのです。亡くなった人たちは、私たちが変わらないのです。

だれもみな、このことをわかつていると私は思います。だれもみな、もう戦争を望んでいません。科学の驚異は人の生活を奪うのではなく、向上させることを目的にしてほしいと願っています。国家や指導者が決断や選択を迫られるとき、この単純な良識を反映させることができるなら、広島

の教訓は生かされるのです。世界はここで、永遠に変わってしまいました。しかし今日、この街の子どもたちは平和に暮らしています。それはなんと尊いことでしょうか。それは守るべき価値あること、すべての子どもたちに広げべき価値あるものです。それは私たちが選ぶことのできる未来であり、同時にまたそれは、広島と長崎が「核戦争の夜明け」としてではなく、私たちが道徳的に目覚めることの始まりとして知られるべき未来なのです。

(原文英文・翻訳/編集部)